

安心安全な利用をめざした公共空間を実現するための 空間設計手法の探求

Research for space design methods to realize safe and secure public space

船曳 悦子（FUNABIKI Etsuko）

歩行者がスムーズに利用できる公共空間を実現するための空間設計手法の提示を目指し、その端緒として、公共空間において利用者の行動調査を行った。

日本で新型コロナウイルスが初めて発見されたのは、2020年1月15日であるが、未だに新型コロナウイルスは猛威を振るっている。厚生労働省は、2020年3月28日「三密を避ける」を提唱し、新型コロナウイルス感染症専門会議は、5月4日「新しい生活様式」の実践例として、人との間隔はできるだけ2m(最低1m)空けることや、会話をする際は、可能な限り真正面を避けることを提言した。

そこで本研究では、新型コロナウイルス感染症に対する「新しい生活様式」が、公共空間の利用者の行動に与える影響を明らかにすることを目的として、「身体的距離の確保」について、観察調査と定量的な分析を行った。

これまでも大阪駅のアトリウム広場において、利用者の行動調査を行ってきたことから、新型コロナウイルス感染症流行前の状況と比較するため、JR大阪駅のアトリウム広場を研究対象地とした。調査日時は、新型コロナウイルス流行前の2019年7月28日(日)と29日(月)、緊急事態宣言解除直後の2020年5月29日(金)と5月30日(土)、緊急事態宣言解除3か月後の2020年8月29日(土)と8月31日(月)の計6日間とした。一般的な利用状況を把握するために、平日の通勤時間帯を避けて、10時に初回の調査を行い、以後、16時まで1時間毎に計7回調査を行った。調査方法は、広場全体を観察できる定位置より、1名の調査員が1時間ごとにデジタルカメラで写真撮影をする。撮影のタイミングは、各時刻から0秒、5秒、10秒、2分30秒、2分35秒、2分40秒経過時点とした。分析手順は、5秒間隔で3連続撮影した写真の内、各時刻の5秒経過時点で撮影したものを基準に行う。平面図上に記録するため、画像変形ソフトを用いて加工した撮影写真を配置し、平面図と撮影写真が正確に重なるようにする。撮影写真に基づき、通行者と停留・滞留者を判別し、平面図上へ記録する。その際、通行者については通行の向きを、停留・滞留者については、行動、年齢、性別を記録した。

分析及び考察の結果、以下のことを見出した。

- (1)新型コロナウイルス流行以降は、イベントの中止に伴い多くの人が集まることは抑制されているが、休日の利用者数は、新型コロナウイルス流行以前の平日の状況に近い状況である。
- (2)停留・滞留者の行動位置は、新型コロナウイルス流行前後で変化は見られず、西側の店舗範囲と入口、周辺の壁面に近い位置及び通行空間上にも広がっている。
- (3)緊急事態宣言解除後から3ヵ月経過時点では、緊急事態宣言解除直後に比較すると、休日、平日ともに停留・滞留者はわずかに増加したが、停留・滞留位置は、より均等化する傾向がみ

られた。これは、新型コロナウイルス流行下の「新しい生活様式」が定着してきた結果と考えられる。

なお、この研究成果は、船曳悦子 他：「新しい生活様式」が公共空間の利用者の停留・滞留行動に与える影響－JR 大阪駅アトリウム広場を対象として－，日本建築学会技術報告集，第 27 号，第 67 号，pp.1379-1383，2021.10 にて報告を行っている。